

この40年——日本福音主義神学会の一員として

宮村武夫

序

1970年からの40年の歩みは、まさに神の恵み。「神の恵みによって、私は今の私になりました。」(Iコリント15章10節)との信仰告白に声と心を合わせます。日本福音主義神学会の一員として、「この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた」(ヨハネ1章16節)のです。ですから、「わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。主の良くしてくださったことを何一つ忘れるな。」(詩篇103篇2節)の呼びかけに応答して小さな神の恵みの神学の序曲を奏で、小文を紡ぎたいのです。

1) 設立総会出席

1970年、東京の練馬バプテスト教会で開かれた日本福音主義神学会の設立式に、一番若い世代の一人として、恩師渡邊公平先生と連れ立って参加しました。あの時の出席者で、現役の会員は、今や幾人おられるでしょうか。

年月の流れの中ですべてを忘れ去る可能性が高い私たちの状況の中で、今回の記念号を企画実行なさる、本誌の編集担当の方々に敬意を払います。

2) 1986年4月東京から沖縄、東部部会から西部部会へ

日本福音主義神学会の一員としての歩みは、大きく二分できます。1986年4月東京から沖縄への移住を境に、それ以前・ピフォーとそれ以後・アフターです。

生まれ育った東京から沖縄への移住後25年、西部部会の「主のしもべ仲間」(黙示録22章7,8節)と主にある交わりを深める楽しい恵みの経験を重ねて来ました、感謝。

I 1970年—1986年、東部部会

1) 説教者としての自覚と実践

1958年、日本クリスチャン・カレッジ1年生の秋、アメリカからのジーンズ宣教師とカナダからのプライス宣教師、両婦人宣教師が埼玉県寄居で開拓伝道を開始した第一歩から、私はお手伝い。生まれたばかりの寄居キリスト福音教会で毎週主日礼拝説教を担当、十代の説教者の卵の誕生です。その時からカレッジでの3年半、二人の婦人宣教師の深い祈りに支えられ説教を継続し、小さな主にある群れが成長する中で私自身も育てられ、カレッジ卒業後、寄居キリスト福音教会の初代の牧師に招かれ着任しました。

小さな交わりは、みことばを中心とする素朴なもので、危なっかしい初陣の説教を深い祈りをもって毎週聞き続けてくださいました。この50年余の年月を貫いて、今も、最初の説教を覚えていると折に触れ私を励ましてくださるあの方の方がいます。

確かに、説教者また説教者の妻としての道の基盤は、1958年からの年月、あの寄居で主の一方的な恵みにより、主にある兄姉との堅い信頼の絆の中で据えられたのです。(宮村武夫著作I『愛の業としての説教』、3~4頁)。

1967年10月1日、4年間の留学中待ち続けてくれた寄居キリスト福音教会に、私は戻ることが出来ました。1965年4月12日に結婚式をあげた妻君代と生後2箇月の長男忍望と共に。迎える側も、迎えられる側も、ひたすら喜びに満たされた恵みの時でした。

小さな群れは『月報』の発行など一つ一つの出来事を通し、主にある信頼関係をますます深めて行くさなか、思いを越えた事態に直面したのです。

青梅キリスト教会の後任牧師の必要が生じ、小さな日本新約教団常議会は牧師移動の苦渋の決断・選択をなし実行。当時、寄居に留まることを強く望んで

いた君代個人の望みや4間待ち続けた方々の思いを越えて、1970年4月から、青梅キリスト教会牧師また前年に設立されたもみの木幼稚園園長として、私は歩み出したのです。

2) 『礼拝の生活』

1970年は、埼玉の寄居から都下の青梅へ私ども家族が移住した年であり、私の青梅キリスト教会牧師としての歩みと日本福音主義神学会の一員としてのそれとは、こうして時期的にまったく重なります。

①礼拝と生活ではなく、礼拝の生活

青梅キリスト教会移住直後から、複数の人々の協力で、毎週謄写版印刷の『礼拝の生活』を原則として毎週発行。礼拝と生活の二本建てではない。礼拝しつつの生活、生活のただなかでの礼拝、まさに礼拝の生活だと確認しつつ、1970年から1986年にいたる営みでした。

②東京キリスト教短期大学、東京基督神学校、日本女子大学

1969年4月から東京キリスト教短期大学で、続いて1972年から東京基督神学校で、さらに1978年から日本女子大学で授業を担当するようになりました。

すべての授業・講義を、神のことばの説教者として担当してきた事実を今にして覚えるのです。二足の草鞋(わらじ)を履くのではない。教会の講壇で説教しないことを、教室の教壇で語ることはないと言ってきました。

ですから、『礼拝の生活』では、青梅キリスト教会での説教と直接結びつく文章を書き続けたばかりではなく、神学校と大学での講義の内容も直接または間接に記述しました。

また「説教がより整えられることを目的とし、説教の充実をみざす実践的目的のために書」いた、そば屋のてんぶらの論文(「そば屋のてんぶら、アルファとオメガ」著作集5『神から人へ・人から神へ』、ヨベル)をはじめ幾つかの著作を含め著述一切の種は、『礼拝の生活』の畑に蒔かれたものであり、それなりの収穫なのです。

3) 「……つつの恵み」

1970年代と80年代、東京キリスト教短期大学で聖書解釈の授業を担当していた際、毎年授業で紹介してきた文章があります。他の二つの神学校でも、同様に紹介しました。

それは、『キリスト教綱要』の序文・「ジャン・カルヴァンより読者の皆さんに」の最後で、カルヴァン（1509-1564）がアウグスティヌス（354-430）の書簡から引用している、以下の文章です。

「わたしは進歩しつつ書き

書きつつ進歩する人の一人であることを告白する」。

ここに、「……つつ」の恵みの実例とその実践の継承を見ます。

あのアウグスティヌスにして、一度にすべてではない。唯一の道、それは「……つつ」の道であると教えられます。

私どもとカルヴァンの間に横たわる世紀の隔たりに倍するほどの時の隔たりを越えて、カルヴァンもアウグスティヌスに少しも気後れすることなく、今、ここで「……つつ」の道をひたすらに歩むのです。今16世紀に生きる責任と特権は、あの偉大なアウグスティヌスではなく、この小さき私・カルヴァンに委ねられた使命である恵みの事実心満たされながら。

そして今、21世紀に生きる苦しみと喜びは、あのアウグスティヌスでも、カルヴァンでもなく、なんと、なんとこの小さき私たちそれぞれに委ねられている、神のユーモア！

4) 日本女子大学での授業

教会でも神学校でもない、普通の教育の場で聖書を語り続ける喜び、その事実の意味深さについて深まる確信。思えば、日本女子大の授業が一つの原点です。渡邊公平先生の定年ご退職後を引き継ぐ形で、日本女子大英文科の講座『聖書』を、1978年4月より担当。聖書そのものを率直に伝達すれば、彼女たちは「尊いアダム・エバ・人間」ですから、確かにしっかり受け止め応答してくれる、毎回試験答案を読むのがなんとも喜びでした。

当時英文科の教授であった新井明先生は、以下のように記してくださっています。

「……それまでは英文学科の渡邊清子教授のご夫君にあたる渡邊公平牧師がその科目の担当者であられた。同牧師が定年でお辞めになるに及んで、……そのときに公平牧師先生の愛弟子のお方が来てくださることになったと聞いた。そのお方が宮村武夫先生であった。よかった！と思ったことであった。……先生は生き生きとした授業をしてくださり、学生たちに深い影響をとどめた。（学生たちの様子から、それが分かった。）ことばとしての欽定英訳聖書の面白さは当然として、それがもつ迫力を若い世代に訴えてくださった。その結果、やがては教会に通う身となる若者たちが生まれてきた。その講義は1985年度までつづけられた。学園にとっては恵まれた八年であった。」（宮村武夫著作6『主よ、汝の十字架をわれ恥ぢずまじ』巻頭言）。

学生方の幾人かとは、今でも幸な交流を続けています、その一人の姉妹のことば。

「英文科の授業を、教育学科の私は、単位とは無関係に2年間伺いました。」

先生のお話は緻密で丁寧でした。第一コリント12章の箇所、『あの人の目にととても惹かれたという話は聞きますが、耳に惹かれたということは聞いたことがありません。』という先生の真面目な冗談に、学生たちが遠慮がちに笑っていました。

友人の一人が「先生が、『本当に神様がいます』とっておられることは感じる」と言っていたこともあります。……

宮村先生と私たちの聖研の交流は、先生が女子大をお辞めになられてから現在までもずっと続いています。」

II 1986年-2010年 西部部会

1986年4月、それまでの教会や神学校と大学での役割を後にして、当時数年間無牧が続いていた首里福音教会の牧師となるため、私どもの家族は沖縄へ移住。生活全般にわたり大きな変化を経験し、住居など制約の厳しい状況下での営みを味わいました。

そうした中で、東部部会から西部部会への移動が実り豊かなものとなった背景に、お二人の方との出会いがありました。

1) 西部部会のお二人

①神戸ルーテル神学校の鍋谷先生

神戸ルーテル神学校の鍋谷先生が、そのままでは孤立しかねない状況の私を、関西に呼び出してくださったのです。

その方法は、実に善意と創意に満ちたもので、部会での講演だけでなく、神戸ルーテル神学校と神戸改革派神学校との合同授業を計画、集中講義担当の機会を提供。しかもそれまで私が書いてきたものをご自身で検討、講義の内容にまで行き届いた示唆を与えて下さいました。こうして関西までの往復の経済的必要も満たされました。

実に深い励ましでした。私なりに西部部会と沖縄の架け橋になりたいと心定め実行した源泉でした。現在沖縄在住の部会員は8名、鍋谷先生の好意の一つの結実と理解します。

②神戸改革派神学校の牧田先生

沖縄に移住して3年ほど経過した頃、神戸改革派神学校の牧田先生が卒業生の門安を兼ねて奉仕のため沖縄を訪問。卒業生の村山牧師とは、短期間の間に交わりを深めており、牧田先生を私にご紹介くださいました。

そこで沖縄の北部・山原へ一周5,6時間のドライブにお二人を誘ったのです。「沖縄での先生との出会いを深く主に感謝いたします。」と牧田先生もお書きくださいました。車中での沖縄以外では普通考えられない長時間の対話において、生きた神学的思索の展開、恵みの出来事が現実となったのです。二人の関心が実に深く重なり合い神学をめぐる語り合いは、ことのほか楽しく有意義でした。

沖縄聖書神学校で1987年から1995年まで私は新約関係担当。引き続き、1996年から2006年まで組織神学を担当する際、牧田先生は、ゴードンでの恩師ロジャー・ニコル先生（当時80歳代でフロリダの改革派神学校客員教授）と同様、相談にのってくださり、お二人とも私の新しい営みをととても喜んでくださいました。

牧田先生との対話、その目に見える形での結晶が、『宣教・説教と組織神学』（『愛の業としての説教』）なのです。

2) 二つの課題

1986年月からの沖縄での神学的歩みを、あえて二つの課題に絞り報告します。

①沖縄で聖書・聖書で沖縄

聖書を読む。これは主イエスに従う私たちの歩みにおいて最も基本的な必要条件です。しかし十分条件ではない。この一事を沖縄移住前後から次第に明確に意識するようになっていました。一人の牧会者、キリスト者、人間として聖書を読む。聖書に何がどのように書かれているか著者の意図を探り、聖書のメッセージに従い生きながら伝えて行く。それだけで十分なのだと思いついてははいけない。もう一歩前進する必要を自覚しやがて痛感し始めていたのです。

聖書に何がいかにか、何故書かれているのかを知り受け止めるのは、それをもって、自分が生きている現実、いや生かされている現実を読む、私の場合なら聖書で「沖縄を読む」ため。この営みを継続することこそ、沖縄で聖書を真に読み、神学の営みをなし続けることだと心に刻むようになりました。

たとえば、1996年9月8日発行の『首里福音』（青梅の『礼拝の生活』と同じ役割を首里福音教会で目指す）480号に、以下のように「台風の受け止め方—伊江島中高生キャンプ継続の中で台風の神学への一歩—」を書きました。

「……、伊江島中高生キャンプが台風12号の影響で8月15日(木)ー17日(土)に延期されたことをめぐり、幾つかのことを考えさせられ学びました。以前青梅キリスト教会でもみの木幼稚園の運動会と雨の関係で直面した事実と重なります。しかしさらに沖縄では台風（石島英、『台風学のすすめ』、副題「沖縄からみた、台風自然と風土」）とのかかわりでどのように歩むべきか、より連続性のある年ごとの課題です。……」

実は、『台風学のすすめ』の著者石島英先生に感謝の意を現したく著者紹介の欄に載せられていた現住所に、以下の手紙を差し上げました。